

# 編集後記にかえて

安西 信一

「私は美人が好きだ。——むろんこれは事実だし、本会の会合における密かな楽しみの一つも、その種の会員に多数お目にかかれることにあるのだが(些かお世辞が過ぎたろうか)、しかしここでの問題はもとより私の個人的性向ではなく、こうした発言に向けられる無言の圧力である。現在我国では、多少とも責任のある男性がこうした発言を真顔ですることはタブーに近い。少なくとも発話者が知的でないことでの十分な証拠になる。況や、大学教師が編集後記に書くべきことではない(だから小心な私は、上の言葉に「」など付けて責任回避を試みた訳だ)。

なるほど「言葉狩り」と呼ばれる事態が瀰漫する昨今、語ってはならぬ事柄は多い。しかし奇妙なのは、この社会が一方では破廉恥な迄に美人好きなことである。美人アナ。美人女将。美人棋士。新人演奏家や作家など美人でなければ一顧だにされない。この「唯美主義」が就中顕著となるのは、それが否定的な力——醜さに対する強迫的な恐れ——として作用する時である。殆どの女性が抱く肥満コンプレックス。醜痕(オウゴン)を持つ者へのいじめ。それを逃れる為の朝シャンという名の禿ぎ(赤坂憲雄『排除の現象学』・大塚英志『少女民族学』)……。

これほど美人が偏重され、醜さが忌避される社会にあって、何故「美人好き」を公言してはならないのか。井上章一は、旧来の醜悪な知識人達のルサンチマンを挙げる(『美人論』)。それもあろうが、明らかに最大の原因は、こうした発言が差別を含蓄することにある。今日、差別的でない形で人の美醜を論ずることは極めて難しい。それには美の概念を拡散させるか、プラトンをシラーを援用して煙に巻くしかないが、勿論これは逃避である。実際、容姿の美醜に限れば、現在の「美の基準」は、本音のレヴェルでは驚くほど画的(従って差別的)であり、貧困ですらある(尤もこれには生物学的根拠があるのかも知れない……蔵琢也『美しさをめぐる進化論』)。そして美醜を論ずることの回避が、全体主義的

貧困化を生むということの事態は、芸術の場合にもそのまま妥当するのではないか。美の問題を、照れずに(「」を付けずに)、しかも豊かに論ずる勇氣を持つこと。本誌がその一助になればと思う。

(あんざい・しんいち 広島大学)

本号掲載論文中、岡田、金、大石、呉、四氏の論文は、当会大会および例会に於ける口頭発表に基づくものである。

## 編集委員

青木 孝夫・大井 健地・大橋 啓一  
香川不苦三・金田 晉・倉橋 清方  
園府寺 司・齋藤 稔・幣原 映智  
高木 茂登・八田 典子・水田 一征  
出原 均・水島 裕雅・安西 信一  
永田雄次郎・松本 真・伴谷 晃二

## 藝術研究

第七号

頒価一五〇〇円

平成六年七月十五日 印刷  
平成六年七月十六日 発行

編集 広島芸術学会年報編集委員会

発行 広島 藝 術 学 会

〒724 東広島市鏡山一―七―一  
広島大学総合科学部比較文化研究室気付  
TEL 〇八二四―四一六三三五  
or 六三三〇

印刷 柏村印刷株式会 社

〒730 広島市中区国泰寺町二―五―二七  
TEL 〇八二―二四六―八〇〇〇